

5. まとめ

5-1. 明石公園の景観形成の考え方 ー目指す景観の創出

- ・本計画では明治時代の明石公園・明石城の景観を目指すこととし、景観テーマを城と公園の多様な緑とが調和し、かつ明石城の魅力を感じられる「城を活かした公園の景観」と設定した。
- ・明治時代の明石城は、多様な樹種が生い茂るが、明石城の特徴である櫓や石垣の高さ、長さ、隅部が確認できる。
- ・本計画においては、石垣の隅部、稜線、威容をみどころとして設定し、周辺を重点的に整備することで、明治時代のように主要な部分が確認できる景観を創出することとした。
- ・明石城跡全体を歩き石垣や櫓を見ることにより、明石城跡の雰囲気を感じ景観を楽しんでいただくシーケンス景観による魅力づくりを行うこととした。
 - ①中（遠）景（明石駅ホームなど）…明石城の存在を認知させ、城郭に誘う
 - ②中景（園内かつ両櫓が視認できる地点）…①で誘われた人が雄大な景観を楽しむ
 - ③近景（石垣の下や帯曲輪など）…石垣を間近に感じる
- ・みどころが確認できるような優れた視点場を設定し、視点場間をつないだ主要動線を歩くことで、視点場からの優れた眺望と、視点場間の樹木の隙間に石垣・櫓が見え隠れする眺望が連続的に変化する動的・連続的な景観を創出する。



明治時代の様子（明治23年の銅版画）



整備イメージ

5-2. シークエンス景観（主要動線におけるストーリー）

設定した主要動線を歩くことで、以下のような景観を楽しみ、明石城の景観に感動していただけるように、景観づくりを行うこととする。

① 誘う景観（中遠景：JR明石駅プラットフォームからの眺望）

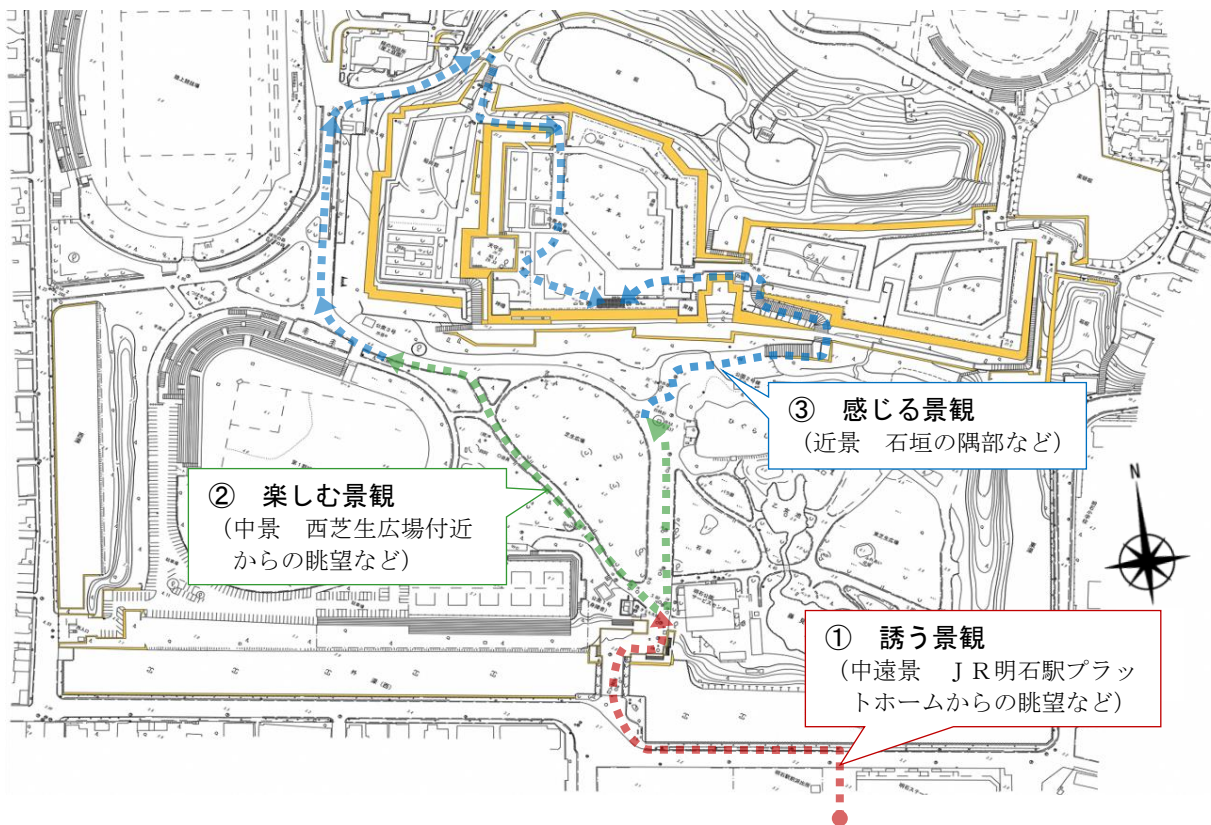
JR明石駅から城の存在を知らしめる櫓と全長380mの石垣からなる統一感のある景観を見せることで、近くで見たいとわくわく感、期待感を膨らませる景観づくりを行う。

② 楽しむ景観（中景：西芝生広場付近からの眺望）

期待を胸に足を進めるが、駅を出た後、明石城の姿は一向に確認できない。正面入り口を通り、園内へと足を踏み入れると再び姿を現す明石城の威容に来園者は驚く。そこから正面園路（もしくは西側園路）を歩いていくと明石城の雄大な石垣、両櫓が輪郭を現し、来園者の驚きは城郭を訪れた楽しみに変わる。

③ 感じる景観（近景：石垣の隅部）

園路をさらに進み、より明石城に近づくと、一度全貌を現した明石城が再び樹木によって見え隠れする。より見やすい場所を探すためさらに近づくと、石垣の高さや、二段になっていることなどに気づく。櫓の下で歩を止め、櫓を見上げると、江戸時代から残る櫓・石垣が、間近に控えており明石城を感じることができる。特に扇の勾配と言われる反りを持つ石垣の隅部は美しくは明石城の白眉と言える景観である。更に石段を登り、本丸に足を進めると櫓が姿を現す。櫓は、中景から見て感じた以上の大きさがある。そこから、城としての多種多様な景観を楽しむことができ、400年の時空を感じる。



主要動線におけるストーリー

5-3. 眺望の変化（フォトモンタージュ）

石垣保全のため石垣周辺の樹木を除伐、また視点場より石垣の上部が視認できるよう樹木を除伐・剪定する。現況に比べ、石垣および櫓が視認しやすくなることが想定される。次頁より、現況と整備後のイメージ（フォトモンタージュ）を比較する。

① 誘う景観づくり（中（遠）景：JR明石駅プラットホームからの眺望）

石垣の上部を連続して見せることで、日本有数の東西約380mに連なる石垣の全長が視認できるよう、支障となる樹木を除伐・剪定する。

整備前



整備後（フォトモンタージュ）



- 整備前と比べ、石垣上部が視認でき、稜線が確認できる。
- 隅部が視認できるようになる。

② 楽しむ景観づくり（中景：西芝生広場付近からの眺望）

公園の樹木と石垣との調和に配慮し、巽櫓・坤櫓間の石垣の上部 1/4 程度と石垣の隅部が視認できるよう、支障となる樹木を除伐・剪定する。



・整備前と比べ、石垣上部や隅部が視認できるようになる。

③ 感じる景観づくり（近景：石垣の隅部）

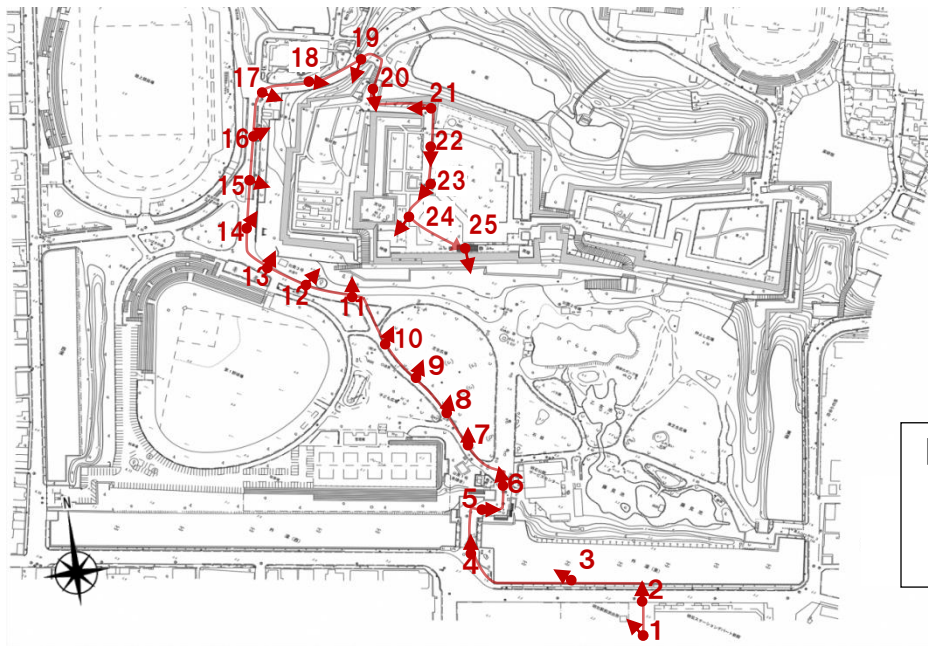
石垣の隅部が直近で視認できるよう、支障となる樹木を除伐・剪定する。



・整備後は、樹木のほとんどが除伐され、石垣隅部および翼櫓が視認できるようになる。

■ルート①のシーケンス景観の変化

明石駅 → 堀 → 大手門（正面入口） → サービスセンター
 → こども広場 → 稲荷曲輪西側 → 桜堀 → 本丸へ

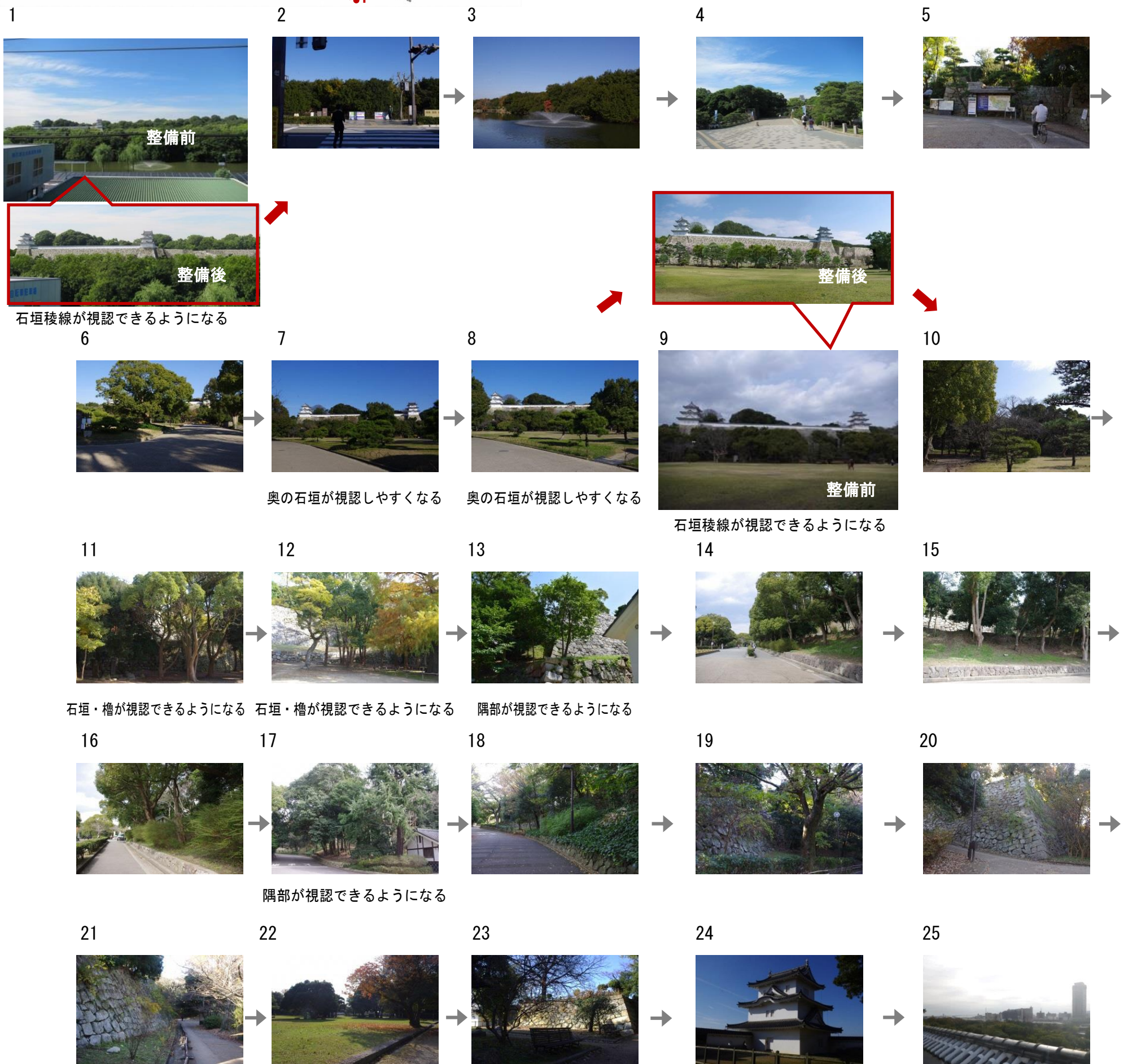


【ストーリー】

- ① 誘う景観（中遠景：JR明石駅プラットフォームからの眺望）（写真1-5）
 駅ホームから明石城の全景を確認させ、来園者の期待を高める。
- ② 楽しむ景観（中景：西芝生広場付近からの眺望）（写真6-9）
 雄大な石垣・櫓と緑の織りなす景観により来園者を楽しませる。
- ③ 感じる景観（近景：石垣の隅部）（写真10-25）
 石垣直近や帯曲輪、本丸において石垣の隅部や櫓で城らしさを感じさせる。

【シーケンス景観の評価】

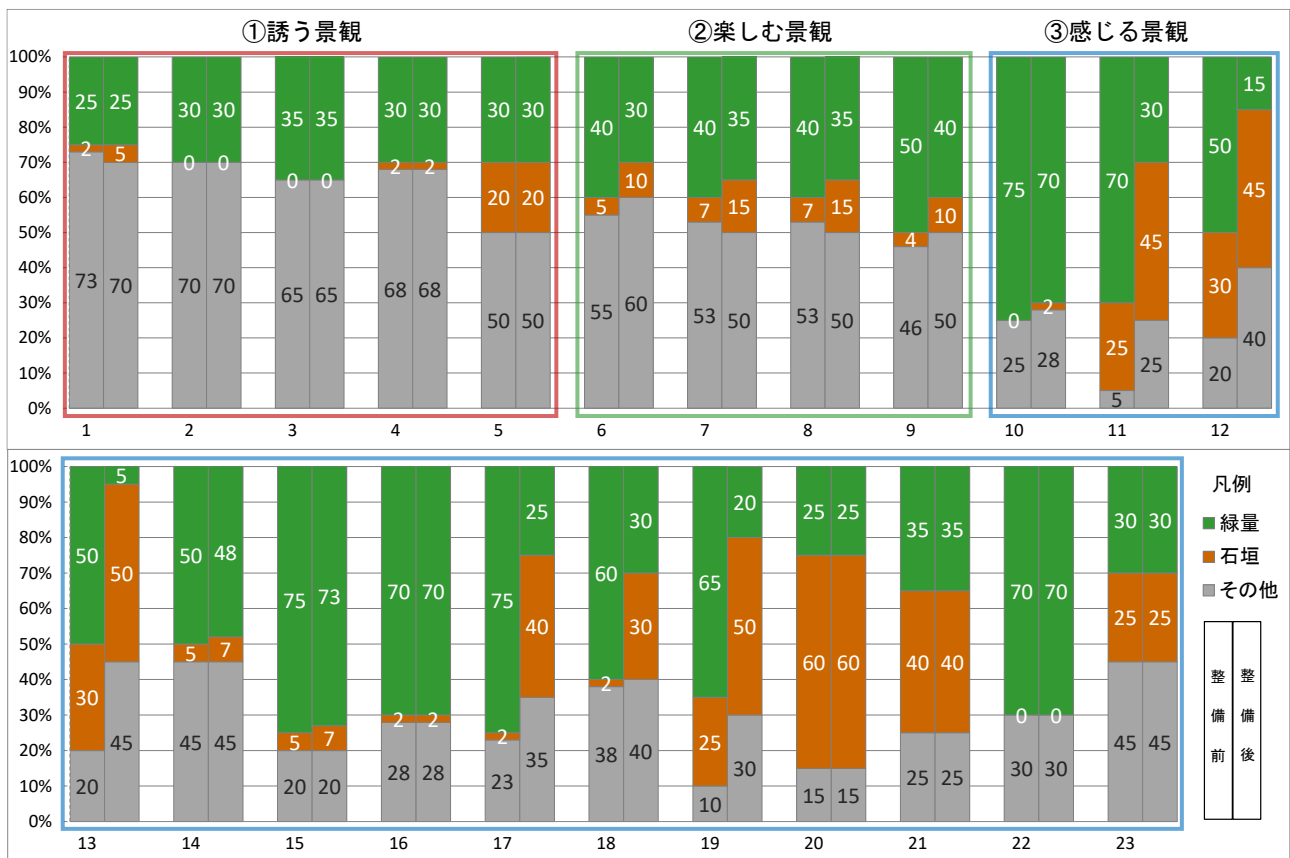
中遠景・中景・近景の視点場、移動動線上において変化が見られ、実際に動線を移動し景観を観ることで明石城を楽しみ、感じることができる。



■ルート①のシーケンス景観における整備前後の緑量変化

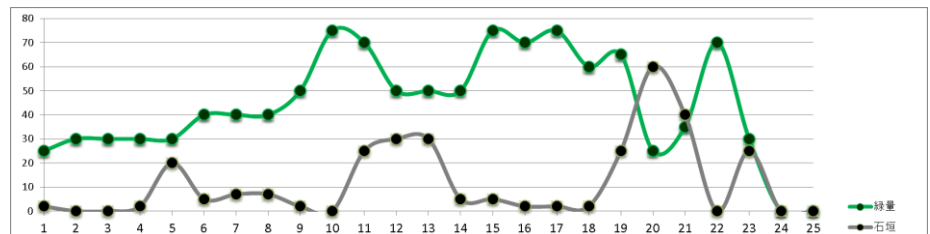
ルート①における整備前後の緑量の変化を以下に示す。

- ・①「誘う」景観では、写真 1（シーンA）からの景観で緑量が減少し、石垣の稜線が視認できるようになる。
- ・②「楽しむ」景観では、特に写真 7、8 で緑量が減少し、石垣・櫓の視認量が増加する。
- ・③「感じる」景観では、石垣直近は除伐量が多いため、ほとんどの地点で樹木量が減少している。特に写真 11、12、13（シーンE）、17、18、19 の隅部および石垣直近の樹木量・石垣視認量の変化が大きい。

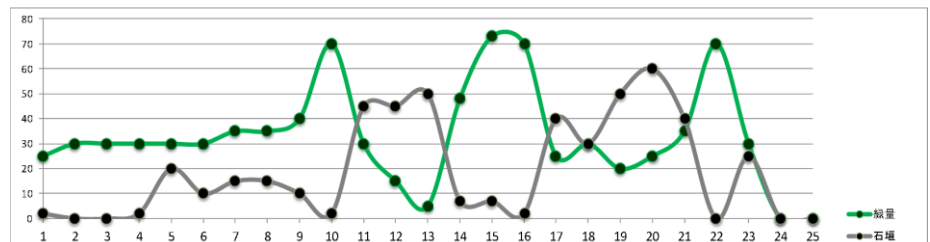


シーン 1 における樹木量・石垣視認量の変化

現況

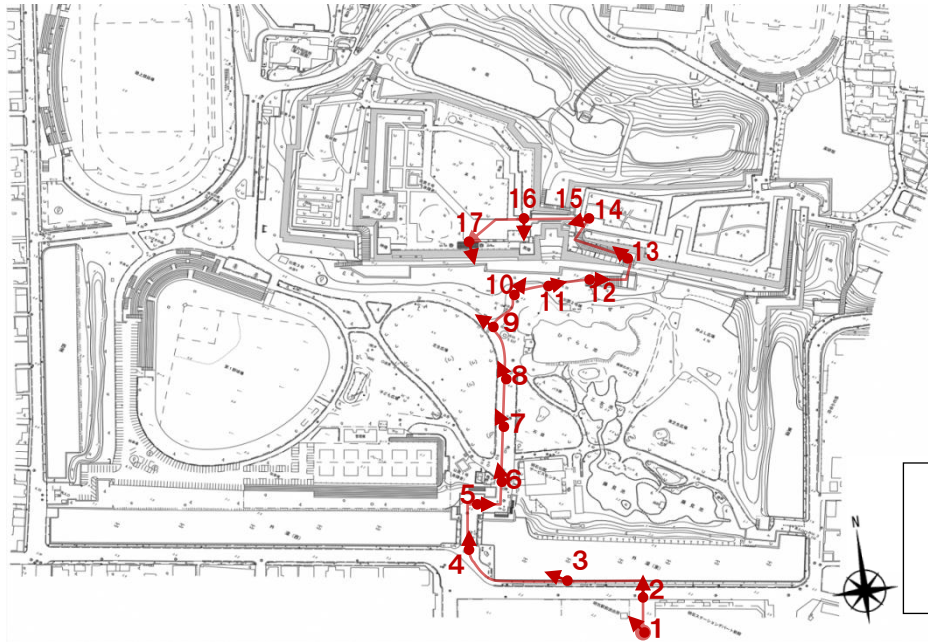


除伐・剪定後



■ルート②のシーケンス景観の変化

明石駅 → 堀 → 大手門（正面入口） → サービスセンター
→ 日時計 → 帯曲輪南側階段 → 二の丸 → 本丸 へ



【ストーリー】

- ① 誘う景観（中遠景：JR明石駅プラットフォームからの眺望）（写真 1-5）
駅ホームから明石城の全景を確認させ、来園者の期待を高める。
- ② 楽しむ景観（中景：西芝生広場付近からの眺望）（写真 6-9）
雄大な石垣・櫓と緑の織りなす景観により来園者を楽しませる。
- ③ 感じる景観（近景：石垣の隅部）（写真 10-17）
石垣直近や帯曲輪、本丸において石垣の隅部や櫓で城らしさを感じさせる。

【シーケンス景観の評価】

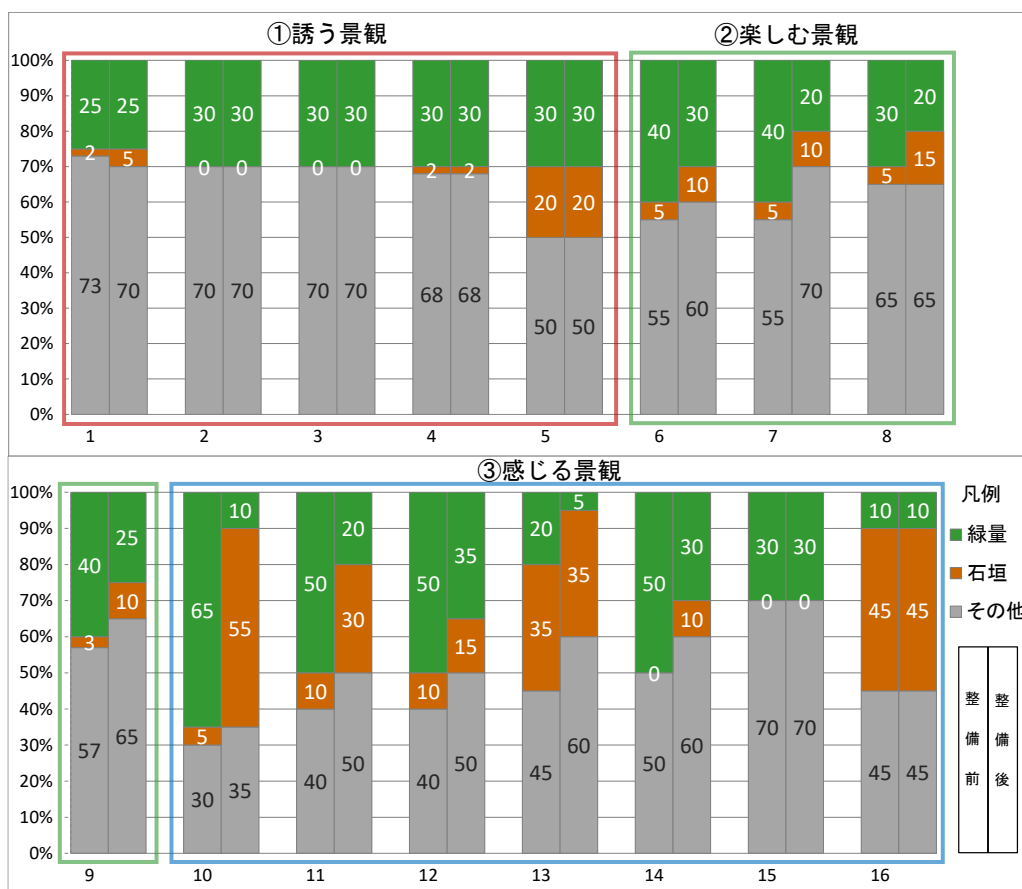
中遠景・中景・近景の視点場、移動動線上において変化が見られ、実際に動線を移動し景観を観ることで明石城を楽しみ、感じることができる。



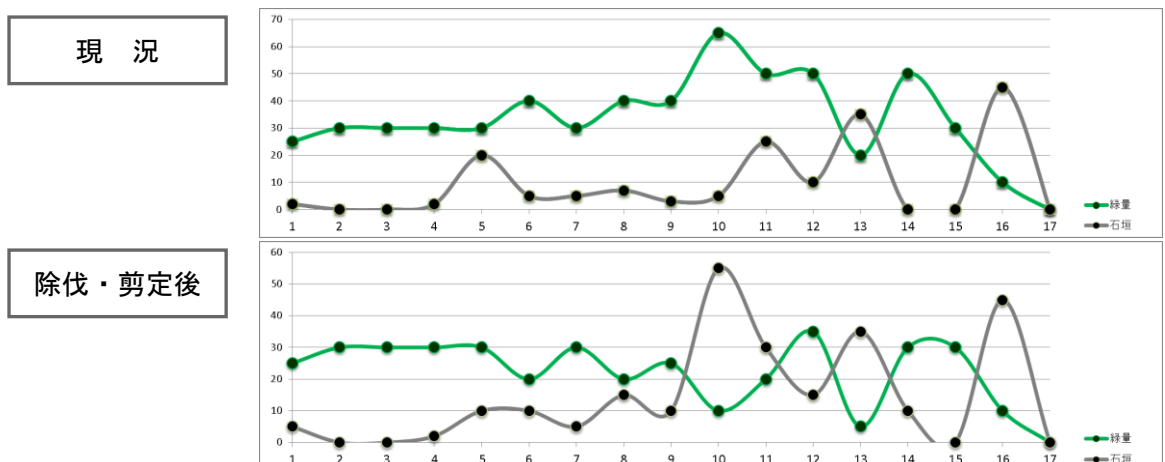
■ルート②のシーケンス景観における整備前後の緑量変化

ルート②における整備前後の緑量の変化を以下に示す。

- ・①「誘う」景観では、写真 1（シーンA）からの景観で緑量が減少し、石垣の稜線が視認できるようになる。
- ・②「楽しむ」景観では、特に写真 7、8 で緑量が減少し、石垣・櫓の視認量が増加する。
- ・③「感じる」景観では、石垣直近は除伐量が多いため、ほとんどの地点で樹木量が減少している。特に写真 10（シーンG）、11、12 の隅部および階段付近の樹木量・石垣視認量の変化が大きい。また、写真 14 では隅部の樹木を除伐することにより、四阿から園内への眺望が視認できるようになる。



シーン 2 における樹木量・石垣視認量の変化



5-4. まとめ

本計画では、景観テーマを「城と公園の多様な緑とが調和し、かつ明石城の魅力を感じられる

「城を活かした公園の景観」とし、明治時代の明石公園・明石城の景観を目指すため、樹木の除伐・剪定計画を策定した。

整備後（フォトモンタージュイメージ）では、除伐前の樹木が繁茂し、主景であるはずの石垣・櫓が視認しづらい眺望に比べ、石垣の稜線や隅部・威容がはっきりと確認できており、城と緑が調和した明石公園らしい景観が創出されることが確認できた。

JR 明石駅からの眺望を中心とした「誘う」景観づくりでは、城と緑、公園の調和に配慮し、芝生広場等にある、大径木（クスノキなど）は除伐せず、剪定とすることで、城の石垣・櫓が視認できるように計画した。

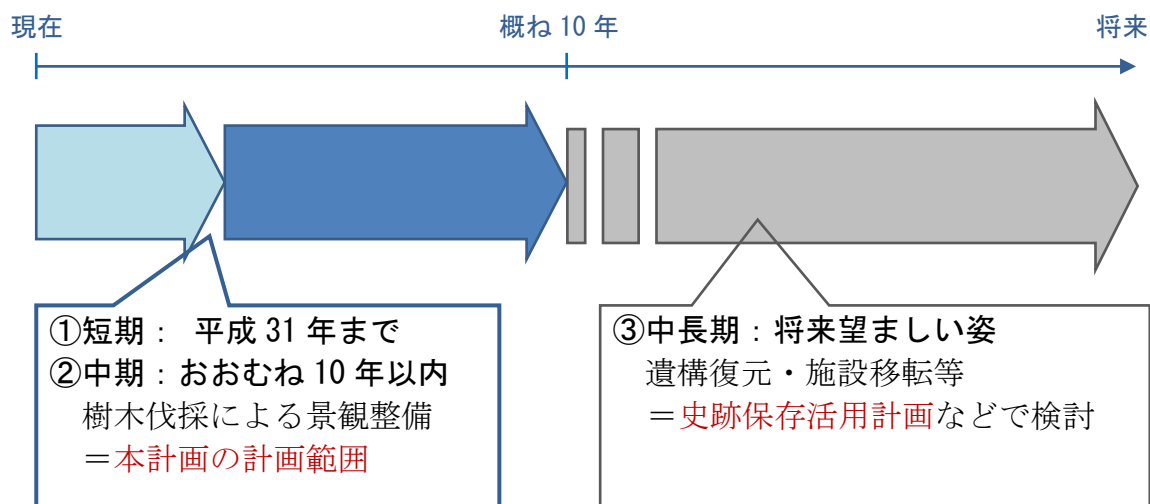
西芝生広場付近からの眺望を中心とした「楽しむ」景観づくりでは、樹木を皆伐するのではなく、可能な限り存置することで、石垣・櫓が見え隠れする動的・連続的で変化のある景観を創出することとした。

石垣・櫓直近からの眺望を中心とした「感じる」景観づくりでは、石垣から 5 m 以内の樹木を中心に石垣直近の樹木を除伐することで、石垣のスケールや構造を細部まで視認できるように計画した。

本計画の実施により、築城 400 周年を迎えるに相応しい景観が創出され、明石城の櫓・石垣の存在は、より多くの人に認知されるものと思われる。

5-5. 整備計画

整備は計画期間であるおおむね 10 年以内に段階的に行うため、優先順位を設定し整備計画を策定する。



5-5-1 平成 31 年の築城 400 周年までに優先的に整備を行う箇所

平成 31 年の築城 400 周年には、明石公園に県内外から多くの人を迎えることから、シーケンス上の視点場として設定しフォトモンタージュにより整備前後の眺望の変化を確認した箇所（シーンA、シーンD、シーンG）及びシーンB、シーンCの景観整備を優先的に行う。

- ①中遠景 明石駅プラットフォームからの眺望確保の整備（シーンA）
JR 明石駅ホームより石垣上部が視認でき、稜線を確認できるようにするため、西芝生広場および武蔵の庭園付近の大径木（クスノキ）を剪定する。
- ②中景 正門、西側芝生広場からの眺望確保のための本丸石垣前の整備（シーンB、シーンC、シーンD）
石垣に影響を及ぼす樹木、石垣が視点場から 1/4 程度視認できるよう整備を行う。
- ③近景 異櫓及び石垣への眺望確保のための整備（シーンG）
石垣隅部や、櫓周辺の樹木を除伐することにより、石垣・櫓が視認できるようにする。
また、景観整備行う前に、積極的な説明会等を開催し県民の理解を得られるよう努めるものとする。

5-5-2 平成 31 年の築城 400 周年以降段階的に整備を行う箇所

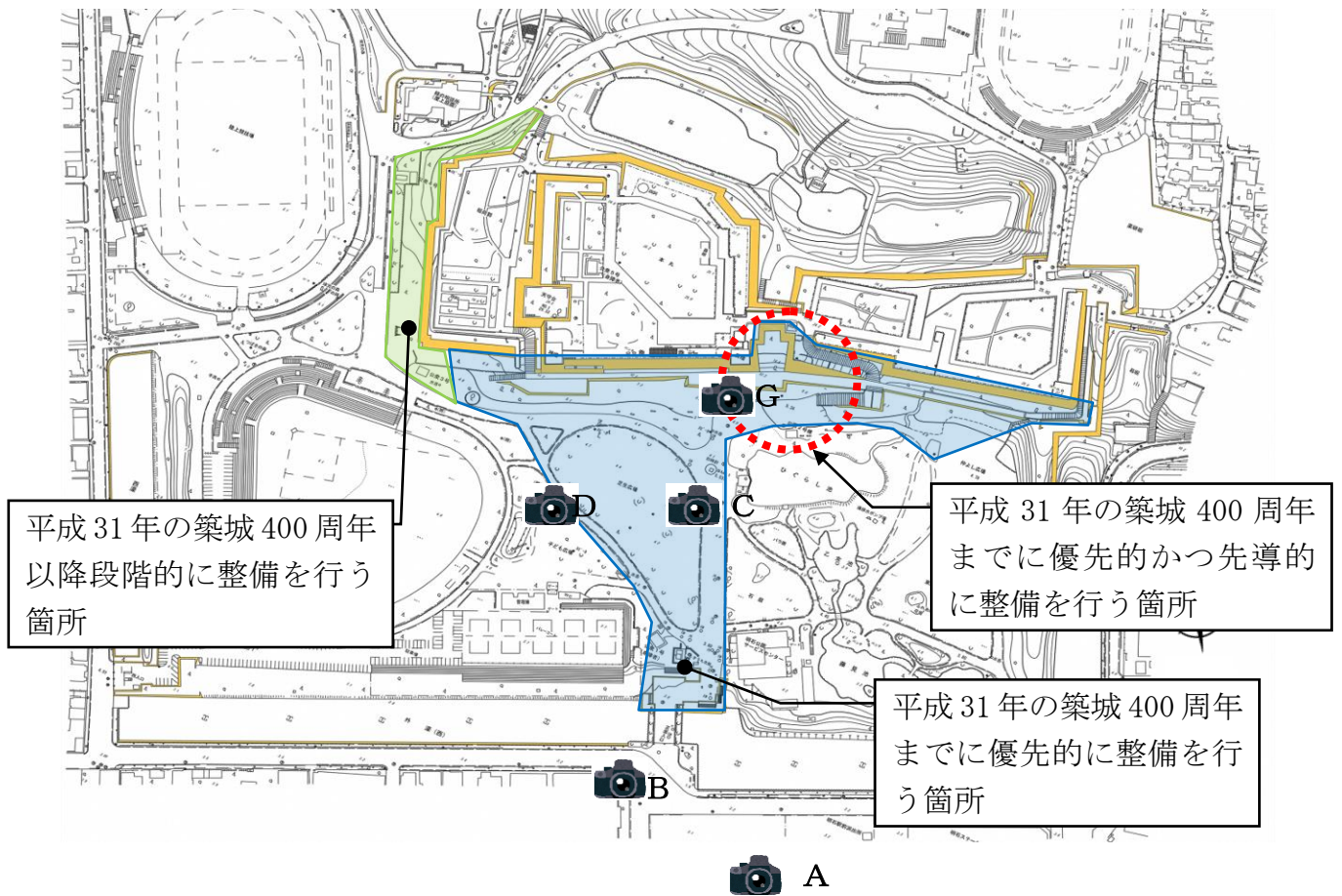
平成 31 年以降は、段階的に整備を行うが以下の優先順位をつけて行う。

- ①石垣に影響を及ぼす樹木の除伐
石垣に影響を及ぼす樹木については放置しておく、石垣を損壊させる恐れがあり、園内の安全に関わる。また、石垣自体の魅力を低下させる原因ともなり得る。さらに、これらの樹木は、成長するにつれ除伐が困難となり、費用が膨大となる。したがって、石垣に影響を及ぼす樹木については可及的速やかに除伐する。
- ②石垣隅部・櫓周辺の樹木の除伐
石垣隅部や、櫓周辺の樹木を除伐することにより、部分的にでも石垣・櫓が視認できるようにする。

③東側外堀周辺の除伐検討

園内東側にある箱堀・外堀は樹木が繁茂し、石垣が全く視認できない状態となっている。この範囲を除伐するためには、まず除伐木を選定するための調査が必要である。

魅力的な景観を創出するために、上記の整備を行う際には主要動線および各視点場からの眺望（シーケンス景観・シーン景観）の確認を行い、不都合がある場合には計画の見直し、除伐・剪定木の再選定を行うこととする。



5-6. 今後に向けて

(1) 史跡保存活用計画の策定

①早期策定

本計画は史跡区域内の一部の区域を対象とした中期および短期の計画であり、明石城跡全体の長期の景観計画を含む、「史跡保存活用計画」等を早期に策定する必要がある。

(2) 外来種の除去

公園内には、ヒマラヤスギ、ラクウショウ等の外来種樹木が植樹されているが、これらの樹木は、城跡として相応しくないため、長期的には除伐を検討する必要がある。

また、外堀に生息するミシシippアカミミガメ等の外来種動物についても、城郭の日本らしい景観を阻害するとともに、本来の生態系を崩壊する要因ともなり得るため、長期的には対策を講じる必要がある。

(3) 維持管理

今回整備する景観を保持するためには、定期的な維持管理が必要となる。

①県民参加による維持管理

明石公園の魅力の発信および環境学習も兼ねて、県民参加のもと樹木や芝生の管理が行えるよう検討する。

②数量的判断による剪定

樹木の剪定時期を判断する方法として、石垣からの距離によって樹高何mで剪定といった基準を設ける。

③実生木の管理

樹木台帳外の樹木は維持管理の混乱のもととなるため、定期的に把握に努める。密植する場所については、樹木の生育環境を整えるため、適度に間引く。

(4) 施設改善による景観整備

今後、よりよい景観を形成するためには、看板をはじめとする明石公園内および周辺の景観を阻害する要因となり得るものの除却、改善を試みる必要がある。

①案内看板の整理

明石公園内および周辺において乱立する看板を整理し、煩雑な景観を改善する必要がある。

②駅舎上屋の屋根材

明石駅前商業施設（パピオスあかし）上階からの景観を考慮し、JR明石駅および山陽電鉄明石駅上屋の屋根材・配色について検討する必要がある。

③櫓・本丸展望デッキからの景観

将来的には、櫓や本丸展望デッキ等から園内、市街地に向けての眺望を整備する可能性も考えられる。その際には明石駅周辺等において建築物の色・高さ規制なども視野に入れた景観整備を行う必要がある。